

慣用句表現における色彩用語の役割

高島 翠・藤井 輝男

1. 目的

われわれの日常生活は、様々な色に囲まれている。見回せば、生活必需品も自然の世界も色とりどりのものにあふれており、さらに、文学や芸術の中でも色は重要なファクターとなっている。

色の役割については、大きく機能的な側面と感性的な側面の2つに分けられる。機能的な側面とは、信号や標識などのように情報をよりの確に伝えるための機能である。感性的な側面とは、ファッションや個々人の好みなど、感情喚起に関わる機能である。どちらも共通して、色のもつ象徴性が利用されている。「赤」は危険や情熱、「黄」は注意喚起、派手、などといった具合である。このような色のもつ象徴性は、芸術やファッションだけではなく、マーケティングや情報デザインの分野でも利用されてきた。食品パッケージでは色を変えることで売り上げや味覚評価にも影響を与えることが報告されている(例えば木下・松田・綾部, 2010)。

色の象徴性は、実際の物体に彩色されているような表面色として利用するだけではなく、感性的な表現にも利用することもできる。絵画作品や舞台装置などに色を用いて登場人物の心情などを演出したり、小説や文学の中でも、「ばら色の人生」、「灰色の人生」、「顔が青くなる」など、色を用いた表現が多用されたりしている。とくにこれらの分野で用いられる表現は、実際に色がない対象に対しても利用されており、色の象徴性が応用されている例として挙げられるだろう。

個々の色がどのような象徴性を有しているのかに関しては、古くから多数の研究が行われている(大山, 1994, 千々岩, 1999)。赤などの暖色系は暖かく活動的で、青などの寒色系は冷たくて沈静的な印象がもたれる。これらの研究によると、色の象徴性は文化や国、時代による違いを超えてある程度共通している。色単独だけではなく、言葉や音、においなどと色との対応性の研究も多く行われている(例えば三浦・齋藤, 2006, 若田・齋藤, 2015, 金子・高島・野口, 2005 など)。このように、異なる感覚様相の対象であっても、そこから得られる感情効果が類似しているため、さまざまな対象との色との対応性が指摘されてきた。とくに言葉は表現する対象の象徴として、色をもっとも使われやすいと考えられる(大山, 2010)。そのため象徴性の特徴が文学的な表現の中で色が用いられていることとも合致する。

色の感性的なイメージが文学的な表現の中で有効的に利用されているものの1つに、慣用句表現がある。「晴天の霹靂」、「隣の芝生は青い」、「朱に交われば赤くなる」など、日本語において色名が含まれる慣用句は多数挙げられる。これらの慣用句は、文学などの特別な分野に限らず、

日常生活においても一般的に広く利用されており、色そのものの象徴性がうまく利用されている現象の1つである。

では、これらの慣用句のもつ意味は、色単独の象徴性とどのような関係があるのだろうか。

色名が含まれる慣用句には、対象の物理的な色や色そのものの象徴性が語源となっているものと、そうでないものがある。「朱に交われれば赤くなる」は、「朱肉」という物理的な対象に付随する色が語源となっている例である。「黄色い声」は実際には声という聴覚刺激に物理的な色が塗られているわけではないが、黄色が「高い」という象徴性をもつために、女性や子供のような甲高い声を表す慣用句として使用されていることが示されている(平凡社編, 1994)。これらの慣用句に対して、色そのものの象徴性に関係がない慣用句も存在する。「真赤な嘘」は赤い色 (Red) という色名ではなく、「明らかであること」をあらわす古代語の「アカ (明)」が語源とされており(小松, 2001)、赤い色 (Red) という色のもつ象徴性から「明らかであること」を表すことになったわけではない。言い換えると、「真赤な嘘」は色名が用いられている慣用句ではあるものの、色のもつ象徴性や対象の物理的な対象に塗られている色そのものを語源にしていないという点で、「黄色い声」とは異なる慣用句の成立過程をもっている。

このことから、「黄色い声」と「真赤な嘘」とでは、色単独の象徴性との関係性も異なることが示唆される。すなわち、「黄色い声」では色名を違う色にした場合、「声」の印象はその色名の象徴性と深い関係性があると考えられるが、「真赤な嘘」では色名を違う色にしても、「嘘」の印象はその色名の象徴性とそれほど高い関係性は示されないと考えられる。

そこで本研究では、色が用いられている慣用句の色の部分を他の色に変えることでどのように印象が異なるのかを調べることにした。具体的には、「黄色い声」と「真赤な嘘」の2つの慣用句を取り上げ、慣用句表現の色を異なる色名に変えた場合、声の印象や嘘の印象が色そのものの象徴性に合わせて変化するのか、あるいは、従来の慣用句と異なる意味をもつのかを明らかにするため、色を単独で提示した場合と慣用句表現として提示した場合の象徴性の変化について検討する。色彩用語の象徴性が慣用句表現に与える影響の違いを検討することで、色彩用語の表現力の可能性を明らかにすることができると考えられる。

なお、「黄色い声」および「真赤な嘘」の慣用句表現に対して、本研究では色を変えた場合の表現(たとえば「白い声」)を、形容句表現と記す。

2. 方法

評定者：日本国籍で正常な色覚を有する大学生 141 名のデータを分析対象とした。嘘条件 74 名(男 34 名、女 40 名、平均年齢 18.89 歳 $SD=1.19$)、声条件：67 名(男 41 名、女 26 名、平均年齢 19.00 歳 $SD=1.13$)であった。

使用する慣用句：用いる慣用句として、「黄色い声」「真赤な嘘」を選定した。これらの慣用句の、色名の部分を異なる色名に変えた形容句表現を作成した。参加者のうち声群は「黄色い声」の形容句表現の、嘘群は「真赤な嘘」の形容句表現の評定に回答した。

実験条件：提示方法として、色単体で提示した場合と形容句表現として提示した場合の2条件を

設定した。用いる色は赤・黄・緑・青・黒・白の6色とした。慣用句（嘘群・声群）×提示条件（色単色・形容句表現）×色（赤・黄・緑・青・黒・白）の3要因混合計画であった。

SD法に用いた形容詞対：先行研究（大山, 1994, 2010 など）を参考に、「快－不快」「良い－悪い」「明るい－暗い」「軽い－重い」「高い－低い」「興奮した－落ち着いた」「明らかな－あいまいな」「強い－弱い」「熱い－冷たい」の9項目を選定した。

質問紙の構成：質問紙は、まず研究の意図や回答方法の説明および、年齢・性別・色覚障害の有無を尋ねるフェイスシートを置いた。続いて、「嘘（うそ）」あるいは「声（こえ）」の印象をSD法で尋ねる項目、色単独（6種類）の印象と、色名を入れ替えた形容句表現（6種類）の印象をSD法で尋ねる項目を設定した。SD法で印象を尋ねるパートでは、9項目の形容詞対を用いて5段階評定を求めた。色の提示順序は、色単独と形容句表現とで共通であり、声群では「黄、黒、赤、青、白、緑」、嘘群では「赤、青、黄、黒、白、緑」の順に提示した。

手続き：大学の一般教養の授業内で実験について説明したのちに、質問紙を配布、あるいは、google formsにて作成したwebページにアクセスして回答するように求めた。回答の際は、全て統計的に処理されること、途中で体調が悪くなった方は実験を中断しても構わないこと、回答を拒否してもなんら不利益を得ないことを説明した。回答時間は、5～10分程度であった。

3. 結果

3. 1. 因子分析

評定尺度の個人差を相殺するために、得られたデータは評定者ごとに標準化した。評定者ごとに標準化した「どちらとも言えない」との差分を用いて、因子分析（最小二乗法、バリマックス回転）を実施し、4因子解を採用した。因子負荷量を表1に示す。第1因子は「熱い」「興奮した」に高い負荷量を示したため「興奮性」、第2因子は「快」「良い」などに高い負荷量を示したため「評価性」、第3因子は「軽い」「明るい」などに高い負荷量を示したために「軽明性」、第4因子は「明らかな」「強い」などに高い負荷量を示したために「明白性」とした。

以下では、4因子の因子得点を分析対象のデータとして、分散分析と重回帰分析を実施した。

3. 2. 分散分析

因子ごとに算出した条件別の平均値を、図1～図4に示す。形容句の群別に、提示条件（2）×色（6）の2要因分散分析を実施した。ここでは、色単色と形容句表現との違いに着目して分析結果を述べる。

表1 因子分析の結果

形容詞	興奮性	評価性	軽明性	明白性	共通性
熱い	.841	.133	-.070	.033	.731
興奮した	.699	-.134	.001	.236	.562
高い	.540	.158	.200	.228	.409
快	.009	.850	.185	.116	.771
良い	.064	.754	.213	.127	.635
軽い	.037	.299	.745	-.035	.648
明るい	.427	.446	.554	.162	.715
明らかな	.204	.302	.065	.530	.417
強い	.259	-.005	-.408	.453	.439
因子寄与	1.785	1.733	1.158	0.652	

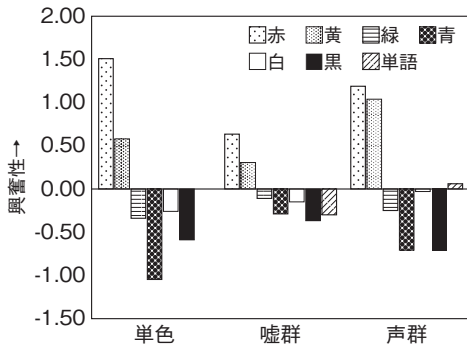


図1 興奮性の条件ごとの因子得点

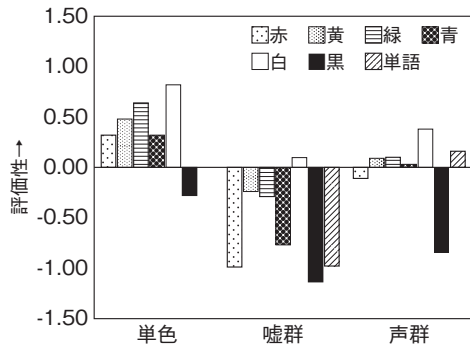


図2 評価性の条件ごとの因子得点

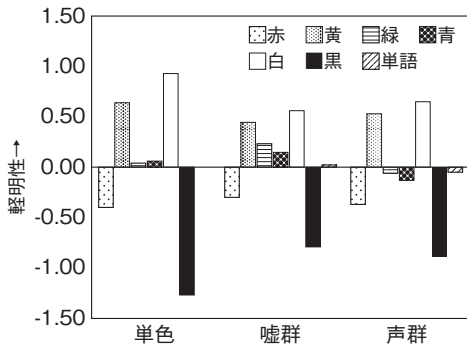


図3 軽明性の条件ごとの因子得点

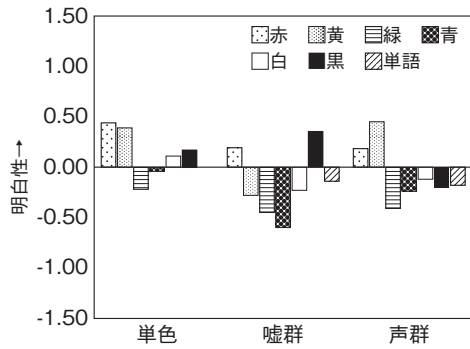


図4 明白性の条件ごとの因子得点

〈虚群〉

興奮性では、提示条件の主効果 ($F(1,71)=2.04, n.s.$) は有意ではなかったが、色の主効果 ($F(5,355)=167.22, p<.001$) と交互作用 ($F(5,355)=50.94, p<.001$) が有意だった。交互作用について単純主効果および多重比較を確認したところ、色単色でみられた青の興奮性の低さが、形容句表現では上昇し、黒や緑と同程度になっていた。

評価性では、提示条件の主効果 ($F(1,71)=259.25, p<.001$)、色の主効果 ($F(5,355)=59.33, p<.001$) と交互作用 ($F(5,355)=6.22, p<.001$) が有意だった。交互作用について単純主効果および多重比較を確認したところ、色単色では黒以外正の値であったのに対し、形容句表現では白以外すべて下がり、負の値になっていた。とくに、有彩色における赤は、黒と同じくらい評価が低くなっていた。

軽明性では、提示条件の主効果 ($F(1,71)=0.38, n.s.$) は有意ではなかったが、色の主効果 ($F(5,355)=139.15, p<.001$) と交互作用 ($F(5,355)=9.02, p<.001$) が有意だった。交互作用について単純主効果および多重比較を確認したところ、色単色でみられた白や黄の軽明性の高さが、形容句表現では下がり、緑や青との差が小さくなっていた。このような違いはみられるものの、他の因子に

比べると色単色と形容句表現との違いはそれほど大きなものではない。

明白性では、提示条件の主効果 ($F(1,71)=46.25, p<.001$)、色の主効果 ($F(5,355)=28.82, p<.001$) と交互作用 ($F(5,355)=11.81, p<.001$) が有意だった。交互作用について単純主効果および多重比較を確認したところ、色単色では赤と黄が正の値を示し、それ以外は0に近い値であったが、形容句表現では黒の明白性が高くなり、赤以外の有彩色と白は負の値を示した。

これらの結果をまとめると、嘘の形容句表現の特徴は評価性に強く表れることがわかる。嘘単独での特徴でも評価性が低く、色の象徴性よりも嘘という言語的な印象が影響を与えていることが示唆される。

また、明白性における色の効果が単色とは異なることも明らかとなった。色単色では赤と黄はそのほかの色に比べると同程度「明白である」という印象であったが、形容句表現では黄の明白性は下がり、かわりに黒が、赤と同程度の明白性を記す結果となった。

〈声群〉

興奮性では、提示条件の主効果 ($F(1,67)=10.03, p<.01$)、色の主効果 ($F(5,335)=222.95, p<.001$) と交互作用 ($F(5,335)=9.87, p<.001$) が有意だった。交互作用について単純主効果および多重比較を確認したところ、色単色では赤よりも低かった黄の興奮性が、形容句表現では赤と同程度まで上昇していた。

評価性では、提示条件の主効果 ($F(1,67)=74.75, p<.001$)、色の主効果 ($F(5,335)=31.33, p<.001$) と交互作用 ($F(5,335)=2.55, p<.05$) が有意だった。交互作用について単純主効果および多重比較を確認したところ、色単色に比べて形容句表現では黒をのぞき評価が0に近い値になっていた。黒は、形容句表現になることでその評価が大きく下がっていた。

軽明性では、提示条件の主効果 ($F(1,67)=0.26, n.s.$) は有意ではなかったが、色の主効果 ($F(5,335)=142.11, p<.001$) と交互作用 ($F(5,335)=11.02, p<.001$) が有意だった。交互作用について単純主効果および多重比較を確認したが、形容句表現と色単色とで大きな違いはなかった。

明白性では、提示条件の主効果 ($F(1,67)=24.46, p<.001$)、色の主効果 ($F(5,335)=25.20, p<.001$) と交互作用 ($F(5,335)=5.17, p<.001$) が有意だった。交互作用について単純主効果および多重比較を確認したところ、形容句表現では白と黒の明白性は下がり、赤と黄は、色単色では同程度であったが、形容句表現になることで黄の明白性が目立つたこととなった。

これらの結果をまとめると、声の形容句表現の一番の特徴は、嘘と同様に評価性に現れることが指摘できる。有彩色の効果がなくなり、値が0に近くなっている。また、興奮性や明白性において、色単色よりも黄の値が高くなることも指摘できる。

3. 3. 重回帰分析

色を用いた形容句表現の印象が、色そのものの印象と表現そのものの印象とによってどのように影響を受けるのかを確認するために、慣用句別に、形容句表現の印象4因子を目的変数、色単色の印象4因子および「嘘」あるいは「声」の印象4因子を説明変数において重回帰分析を実施した。ここでは、それぞれの説明変数の影響力を確認するために、強制投入法を用いた。それぞれの目的変数別に、各説明変数の標準偏回帰係数（有意なもののみ表示）と微税済み r^2 値を表2

表2 嘘群の重回帰分析の結果

変数名	形容句表現の印象			
	興奮性	評価性	軽明性	明白性
単語	興奮性	.088	.103	
	評価性		.138	
	軽明性			
	明白性		.096	
色単色	興奮性	.497		.114
	評価性		.195	-.093
	軽明性		.374	-.241
	明白性			.157
R^2	.289	.255	.366	.131

表3 声群の重回帰分析の結果

変数名	形容句表現の印象			
	興奮性	評価性	軽明性	明白性
単語	興奮性			
	評価性			
	軽明性		.109	
	明白性			
色単色	興奮性	.757		.100
	評価性		.400	.294
	軽明性	.165	.254	.662
	明白性			.157
R^2	.635	.276	.485	.240

および表3に記す。嘘群と声群とでその特徴を以下に述べる。

〈嘘群〉

どの因子においても、総じて高い R^2 値は得られなかった。興奮性と軽明性は、色単色の対応する因子の影響がもっとも高かったが、評価性と明白性は、色単色の軽明性の影響を最も受けていた。色のもつ軽明性の印象が、嘘の重さ（評価性・軽明性）や、嘘の強さ（明白性）を引き出していると考えられる。また、評価性は、他の因子とは異なり、「嘘」という言葉そのものの影響を受けていることが示された。このことから、「嘘」という言葉がもつ印象が、形容句表現の評価を左右させることが示唆される。

〈声群〉

興奮性および軽明性では、.500以上の R^2 値が得られた。評価性および明白性においても、嘘群よりも高い値が得られている。各因子の特徴をみると、すべての因子においてもっとも影響力が高かったものは、色単色の対応する因子であった。「声」という言葉そのものの印象はどの因子でも影響が小さいことも明らかとなった。嘘群とは異なり、色のついた「声の高さ」が色そのものの印象で説明されうること示唆している。

以上の分析結果をもとに、嘘群における明白性の特徴や声群の各因子の特徴に着目し、総合考察にて慣用句表現の成り立ちと色彩象徴との関係について検討する。

4. 総合考察

本研究では、色を用いた慣用句が色そのものの印象にどの程度影響を受けるのか、慣用句の成り立ちの違いによってその印象の程度が異なるのかを調べるために、色単色の印象および、「黄色い声」および「真赤な嘘」の色名を変えた形容句表現の印象を、SD法を用いて測定した。印象評定の結果を因子分析し、形容句表現の印象を色単色および「嘘」あるいは「声」そのものの印象によって説明できるのか、分散分析と重回帰分析を用いて検討した。

ここでは、それぞれの慣用句別に、色単色の印象との違いを、その慣用句に成り立ちに着目して考察する。

4. 1. 真赤な嘘

本来、「真赤な嘘」の赤は「明らか」であることを示している。黄色い声とは異なり、色そのものの印象というよりも表現の表面的な類似性が語源である。

もし、この「明らか」が色そのものの「明白性」という象徴性で説明できるならば、分散分析において、色単色において赤と同程度「明白」と評価された黄も、形容句表現において赤と同程度の値が得られると予想されるが、実際には赤と黒に比べると、形容句表現における黄の明白性は負の値となっていた。また、重回帰分析においても形容句表現の明白性は色単色による説明力は小さく、色単色の明白性よりも軽明性の方が形容句表現の明白性への影響力が大きいことを示している。

日本国語大辞典(日本国語大辞典第二版編集委員会, 2000)をもちいて、「真赤な嘘」のほかに「明らかであること」「はっきりしていること」を「赤」という言葉で表現しているものの用例を確認すると、「真赤な真実(1724年)」「まっかなうそ(1782年)」「真赤な贗せ物(1808年)」「赤はぢ(1649年)」「アカハタカ(赤裸)(1050年頃)」などの言葉がある。また、「明るいもの」を表現する例として、鈴木(1990)は、日本では太陽を赤い色で表現するのに対し、海外では太陽を黄色で表現することを指摘されている。「真っ赤な太陽」とは、「赤い色」ではなく「明るくまぶしい」という意味であるが、言語において異なる色を用いた表現になることから、これらの色彩表現は文化や言語によって異なる効果を生むと考えられる。

異なる言語圏での表現として、日本語では一般的に使用されないが、海外では「白い嘘」という形容句表現がある。英語における「white lie(白い嘘)」とは、「罪のない嘘」として訳され(Brewer, 1994)、相手を傷つけないために用いられる嘘などを指す。本研究でも、他の色と比べると「真赤な嘘」は、評価性の得点が唯一正の値を示した。「white lie」とは、白単独の無垢な印象から用いられる表現ではあるため、あまりなじみのない日本の調査でも他の色に比べると評価性が高かったと考えられる。これに対して、より日常的に「white lie」の表現が用いられている英語圏では、日本のそれよりもより評価性が高くなると予想される。このように、形容句表現はとくに文化によって使われている意味合いが異なり、色を用いた慣用句を海外でも同様に行った場合、文化による違いが大きいことが示唆される。その文化差には、その表現の語源が色そのものの印象にあるのか否かにより、影響の現れ方も異なると予想される。

4. 2. 黄色い声

本来、「黄色い声」とは、黄色が「高い」という象徴性をもつために、女性や子供のような甲高い声を表す慣用句として使用されている。

この「黄色」を違う色にした場合の印象の変化を、分散分析及び重回帰分析の結果からみていくと、まず、形容句表現の印象評価は色そのものの印象評価によって説明できることが示唆された。

分散分析の結果から、黄の単色の印象は軽明性が高く、形容句表現と色単色とで印象に大きな違いはなかった。このことは、「女性や子供の甲高い声」と黄色のもつ「高明度の印象」の類似点から「黄色い声」と言われるようになったことを支持する結果である。

また、色単色では黄よりも赤の興奮性が高いが、形容句表現になると黄の興奮性も赤と同程度

高くなった。これは、一般的に用いられる「黄色い声」という慣用句のもつ興奮した印象が、色そのものの興奮性をさらに強調することにつながったことが示唆される。色の印象から使われるようになった慣用句であっても、慣用句として使われるようになることでその慣用句の表現性による印象が強められる。そのため、色を用いた形容句表現であっても、色そのものの印象だけで説明できるわけではなく、そこには、一般的に使われる慣用句表現の印象が色を用いた形容句表現を強調される可能性も指摘できる。

図1～4に示されたように、各因子の「声」単独の因子得点は、「0」に近い。これは、「声」単独の印象は特徴の強いものではないことを示している。形容句表現を目的変数とした重回帰分析において、単語「声」の印象からの影響が小さかった理由は、ここにある可能性があるが、形容句表現の印象が色単独の象徴性によって強く影響を受けることは明らかとなった。

まとめ

以上のように、本研究から色を用いた慣用句表現は、その語源によって色の象徴性が与える影響力が異なることが示された。「真赤な嘘」のように色そのものの印象ではないところに語源がある慣用句は、色を変えてもその印象評価の変化を色単色に説明を求めることは難しいが、「黄色い声」のように色そのものの象徴性が語源にある慣用句は、色そのものの象徴性による影響が大きいことが明らかとなった。色彩の象徴性を利用することで色を用いた表現力を強めたり弱めたりする可能性が示唆される。これらの結果は、文学などにおける色を用いた表現方法に新たな可能性があることが示唆される。

引用文献

- Brewer E. C. (1989). Brewer's Dictionary of Phrase and Fable. Cassel Publishers Ltd. (ブルーワー, E.C. 加島祥造・鮎沢乗光(編) 伊藤泰雄(翻訳) (1994). ブルーワー英語故事成語大辞典 大修館書店)
- 千々岩英彰(1999). 図解世界の色彩感情事典 河出書房新社
- 平凡社編(1994). 大辞典(復刻版)第7巻 平凡社
- 金子弘美・高島 翠・野口 薫. 音刺激と視覚的図形に関する基礎的研究. 日本色彩学会第36回全国大会要旨集(日本色彩学会誌, vol.29, suppl.) 138-139.
- 木下武志・松田 憲・綾部かとり(2010). 色が味覚イメージに及ぼす影響. 芸術工学会誌, 54, 107-112.
- 小松英雄(2001). 日本語の歴史—青信号はなぜアオなのか 笠間書院
- 三浦久美子・齋藤美穂(2006). 香りに対する調和色の検討. 日本色彩学会誌, 31(4), 256-267.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2000). 日本国語大辞典 第二版 小学館
- 大山 正(1994). 色彩心理学入門—ニュートンとゲーテの流れを追って 中公新書
- 大山 正(2010). 知覚を測る 誠信書房
- 鈴木孝夫(1990). 日本語と外国語 岩波書店
- 若田忠之・齋藤美穂(2015). 音楽の調変化に伴う音の高さと PCCS トーンの対応についての検討. 日本色彩学会誌, 39(4), 147-158.

(たかしま みどり／実験心理学)
(ふじい てるお／実験心理学)